

生涯スポーツを目指す日中体育授業の比較研究

— 体づくり運動の実践を通して —

前天津日本人学校 教諭

東京学芸大学附属小金井小学校 教諭 今井 茂 樹

キーワード：日中体育授業，学習指導要領，体育科目標，体づくり運動

1. 研究の背景と問題の所存

中国では公園の横を通りかかると、日常的に遊具で体を動かしたり、太極拳やウォーキング、バスケットボールやバドミントンなどをプレーしたりして楽しむ老若男女の姿が多く見られる。このような光景は、まさに生涯スポーツを実践していると言えよう。さらに、オリンピックの成功によりスポーツへの興味関心が高くなり、実践者が増えている実態がある。

一方で、日本と同様に運動不足による体力低下や学力重視による体育授業に対する評価の低さをよく耳にする。また、「学習指導要領レベルないし行政レベルでは、『目指すべき体育授業』について、ある意味、明快に語られているにも関わらず、現実に日々展開されている授業実践のレベルでみると、学校と教師によって実にバリエーションに富んでいた」「生涯体育・意欲喚起・学生中心が強調される現在の体育授業にあって、集団行動の主運動・主教材が明確でない集団行動のみで1時間が終わる体育授業もまた現実なのである。」*1 や「上海市における体育授業の現状について、体育授業の教材の取り組みや授業方法の工夫など、教員間に大きな差があった。」*2 との研究報告もなされている。

中国の学校体育の中ではどのような目標・実態のもと、どのような実践がされているのかを考察し、日本の体育授業との比較・検討することで生涯スポーツを目指す両国の体育授業の充実・改善させるための示唆を得ることができるのではないかと考えた。

2. 日中両国の学習指導要領の体育科目標の検討

(1) 日本の学習指導要領の体育科目標

心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。(平成20年 小学校学習指導要領解説体育編より抜粋*3)

(2) 中国の学習指導要領の体育科目標

授業を通して、学生が典型的で実用性の高い技術・技能を身につけ、運動の知識と技能を用いて、生涯身体を鍛えることができるように、また運動技能を日常生活においても活用し、自己防衛意識や能力を向上させる。体育の学習において、学生の勇敢、自信、積極性を優れたクオリティー、協力精神、安全意識を目指して育てていく。(中小学体育(与健康)課程評価与管理標準 より抜粋)*4

(3) 日中両国の共通点

日本では、1970年代から「生涯スポーツ」という体育概念が導入された。一方、中国においても、「生涯スポー

全学年に位置づけられるようになり、現状の課題克服に取り組む姿勢が伺える。同様に、中国においても体力向上・技能習得は特に強調されており、授業見学の際も重点的に指導されていることがわかった。また、麗苑小学校の教師からのインタビューと授業見学の結果、体づくり運動への興味関心は高いと感じた。

以上のことから、両国共通の課題である「体力向上」を目指して体づくり運動を考察単位とすることは意義あることと考えた。

4. 体づくり運動による授業の考察

(1) 学習指導案

2010年10月9日(土)(10:00-10:40)に中華人民共和国天津市麗苑小学校(麗苑小学校グラウンド)3年生34名を対象に授業を行った。右記は指導案である。

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	平均
次元	成果			意欲関心		学び方		協力		
男	3.00	2.94	2.83	2.78	3.00	2.72	2.78	2.83	2.89	2.86
18人	2.93			2.89		2.75		2.86		
評価	5	5	4	3	5	4	4	4	5	5
	5			4		4		5		
女	3.00	2.75	2.75	3.00	2.88	2.94	3.00	3.00	2.81	2.90
16人	2.83			2.94		2.97		2.91		
評価	5	4	4	5	4	5	5	5	4	5
	5			4		5		5		
全体	3.00	2.85	2.79	2.88	2.94	2.82	2.88	2.91	2.85	2.88
34人	2.88			2.91		2.85		2.88		
評価	5	5	4	4	4	5	4	4	5	5
	5			4		5		5		

【表3 形成的授業評価】

本時の指導

- (1) ねらい
- 正しい動きやルールを理解し、仲間と協力して運動を楽しむことができる。
 - 自分の持っている力を精一杯出し切りながら、コツをつかみながらゲームや動きを楽しむことができる。
- (2) 展開

過程	予想される児童の活動	○指導上の留意点 ☆評価
つかむ	1. 準備運動をする。 2. 集合し、本時の流れをつかむ。	○教師主導に必要な部位(手首、足首、腰、肩)を中心に行うように声をかける。 ○本時の学習の流れを確認し、活動の見通しがもてるようにする。
自分の力を出し切って運動を楽しもう。		
取り組む	4. 「おりにかえしの運動」をする。 ・いろいろな動きで走る。 (手足走り、ウサギとび、クモ歩き、アヒルなど) ・いろいろな動きでリレーをする。 (自分たちで作戦を考えてリレーする。)	○並び方が良かったり、応援を積極的に行っているグループを賞賛する。 ○正しい動きで運動できていない児童には、グループ内でアドバイスするように助言する。 ☆友達走りや応援したり、動きの教え合い、励まし合いをしている。 ☆正しい動きでリレーをしている。
まとめる	5. 大縄跳びをする。 6. 学習のまとめをする。 ・集合して、本時の様子を振り返る。 ・速く走る工夫や、正しい動き、力の出し方などの意見を出し合う。	○回し手・跳び手のコツをつかむため、ポイントを確認する。 ○回し手と跳び手はその都度交代し、全員が回し手を体験できるよう配慮する。 ○経験がないようであれば、少人数で縄に入るように促す。 ○学習中の児童の良さ(正しい動きの児童、力いっぱい自分の力を出し切る児童、応援、態度など)を紹介し、賞賛する。

(2) 授業分析

経験不足からできない子が多くいたが、形成的授業評価(※上記参照/数値3.00・評価5が最高値)を見ると児童の成果・意欲関心・学び方・協力の各項目とも値が高く、十分満足できる内容であったと捉えることができる。運動の「楽しさ」を重視した新しい授業に触れることができたことも数値が高いことに関係していると思われる。

(3) 授業後の考察

授業後の意見交換と実態を踏まえ考察すると、麗苑小学校の体育は技能・技術が重視された体育ということが言える。1987年頃、主に日本の「生涯スポーツ論」の影響を受け、中国の教育において、「主体者は生徒でありすべての教育は生徒のために行われることが教育の本質と目的」という新しい教育理念が打ち出された*5にも関わらず麗苑小学校の体育教員からは、「ロシアの体育を参考に」「体力重視・技能向上」といった目標とは矛盾した発言が多くみられた。しかし、少しずつではあるが、生涯スポーツを意識した子どもたち主体の授業が取り組まれていることも確かである。

本実践において「楽しさ」を強調するあまり、中国が重点としている「技能の習得や体力向上」はどのように図っていくのかという疑問を中国人教師は持っていたようだ。「楽しさ」は学習内容を明確にした上で、また子どもたちが何を学んだのかははっきりした上で達成されるべき目標である。今回の授業実践及び意見交換の中でこのことを見える形で伝えることができなかつた。「技能習得や体力向上」は体育科の中で達成されなければいけない内容であることを今回の実践を通して改めて感じた。

5. まとめと今後の展望

本研究では日中の体育科の目標及び子どもたちの実態の検討を通して共通点を探るとともに、共通点にせまった授業実践を行い考察することで、日中体育授業の充実・改善させるための示唆を得ることを目的とした。その結果は、以下の4点に要約できる。

(1) 中国の体育科の目標「健康第一・生涯スポーツ・児童生徒主体・児童生徒個人需要の相違、授業の全体対象」は、日本の体育科の目標「技能や体力向上を図りながら運動に親しむ資質・能力を育て楽しく明るい生活を営む」と相違ない。しかし、依然として「技術教育、競技運動、体力づくり」といった理念が先行していると言わざるを得ない。

(2) 中国の体育授業では、生涯スポーツの理念を取り入れた子どもの主体性や運動の楽しさを強調した授業実践が見られるようになってきている。授業観察を通して感じたことは、技能・体力の向上を全面に押し出している中にも、子どもたちは生き生き活動しており、やらされているのではなく進んで取り組んでいる姿も多く見られた。子どもの姿からは、国は違っても教師が授業の中で目指す子どもたちの姿は同じではないかと感じた。中国の学習指導要領にあたる「体育と健康の課程標準」の目標を中国の全体育教員が把握した上で意識的に教材研究や授業実践に励むことが中国体育授業の向上につながっていくであろう。

(3) 体づくり運動の授業実践を通して「運動の楽しさや喜びを味わわせながら技能を身につけることができる」「考えることを通して技能の向上も一層図ることができる」ことを「技能重視」の中国人体育教師に伝えることができた。これらのことは中国人教師も共感しており、共通理解を得ることができた。

(4) 体育科の目標は相違ないため、事前に双方の国の体育の目標を理解した上で、子どもたちの姿から何を感じるか、目指すところは同じではないかということを通して授業実践やその後の協議の中で話し合い、双方の目標論での共通点を探り合えることができれば、より一層の日中体育理解及び日中体育授業の向上につながるのではないかと。

最後に今後の展望としては、「楽しさ」の強調はそのもととなる体力向上や技能習得を疎かにしてしまうことを改めて感じた。学習内容を明確にし、子どもたちが何を身につけたかはっきりしている授業の中で「楽しさ」が存在するというを、今後研究を進めていく上で留意していきたい。こうした実践が生涯スポーツを親しむ資質・能力の育成につながっていくと確信している。

生涯スポーツの資質・能力の育成を通して明るく楽しい生活態度を営むという目標は世界水準で考えるに値するものと本研究で再認識することができた。

引用・参考文献

- *1 海野勇三 (2002) 「中国のいまを観る—小学校体育授業の現実—」 <http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~unno0622/china-rensai4.html>
- *2 正木健雄 (1998) 小学校における体育授業の内容と効果に関する研究—中国・上海市A小学校の調査から—, 日本体育大学紀要28 (1), pp.47-57
- *3 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版, p.9
- *4 天津市中小学体育 (与健康) 課程評価与管理標準研制組編 (2009) 中小学体育 (与健康) 課程評価与管理標準, 北京体育大学出版社, p.5
- *5 張紅岩 (2008) 日中の学校体育における学習形態に関する比較研究—組織的側面に着目して—, 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第57号, p.328